

殻を破る④

2024.10.17

評価の研究を進めることが、指導と評価の一体化へとつながり、授業改善に結び付くことになる。誰でも指導はするが、評価が弱点となっている。特に、「学びに向かう力」「主体的に学習に取り組む態度」の評価が、ウィークポイントである。もう何十年も前から、指導と評価の一体化と言われて続けている。ということは、一体化していないということである。実際に観点別評価を行うことを想定しているとは思えない学習指導案はないだろうか。

評価というと、診断的評価、形成的評価、総括的評価、絶対評価、相対評価、評価基準と評価規準、観点別評価などがある。何について協議するのかを明確にしておかないと混乱しやすい。どの評価のことを話題にするのかを確認した上で考えたほうがよい。

毎年、研究授業の機会はあるだろう。可能であれば、『少年の日の思い出』『走れメロス』『故郷』の定番3教材で研究授業を行いたい。授業者としての力量が如実に出る。それは怖いことでもある。だが、逃げないでほしい。チャレンジしてほしい。何よりも、生徒が伸びる。生徒が変わる。『故郷』を読んだ中学3年生は、高校で『山月記』や『羅生門』『こころ』を読むのである。

教員は、授業者として10年も経験を積み、口癖も含めて、その人のスタイルができてくる。そのスタイルで、65歳の定年までずっといけるかということ、そうはいかないだろう。誰でも「殻を破る」ときが必要である。『故郷』の授業者は、今回が殻を破るときだった。この授業は第11案となる学習指導案によるものである。その労苦に頭が下がる。様々な人のアドバイスを受けながら、指導案をバージョンアップさせてきた。もともとのスタイルをがらりと変えたはずである。その結果が、あの生徒の姿である。殻を破って正解であろう。だが、注意しなければならないことがある。教員は、すぐに“定位置”に戻る傾向がある。せっかく研究授業でいい授業をしたのに、今までの解説・説明型の授業に戻ってしまう授業者がいる。それは避けたい。

「天ぷらを揚げるには40℃の油に何時間つけてもくったりするだけでしょ。ところが170℃にすると、3分かそこらで一気にからっと揚がる。そこまで到達するエネルギー、熱意を出さない限り、いつまでたっても天ぷらは揚がらない」

今回の『故郷』の授業者、これからどんどん伸びるであろう若手の先生方、日々、授業に悩み、自分の授業を変えようと、もがき苦しんでいる先生方に、この言葉を贈りたい。天ぷらを揚げる先生が、すなわち殻を破る先生である。殻を破り、天ぷらを揚げた先生は強い。そして、天ぷら先生の授業に出会えた生徒は幸運である。殻を破った先生の授業は違う。今回、『故郷』の授業で、殻を破った先生を見ることができた。生き生きと考える生徒に会うことができた。国語人として最上の喜びである。